

真の恩人、五代友厚・福澤諭吉の発見

—大阪商業講習所創設史秘話—

毛 利 敏 彦

1. 『市大百年史』と私

私は、1977年6月の大阪市立大学百年史編集委員会の成立から1987年3月の解散までの全期間にわたって委員を務めた。執筆面では『全学史』冒頭の「第1章 大阪商科大学前史」を引き受けて本学の創世記を取り扱った。傍ら百年史編集室長を兼務し、2名の専任室員（桐村彰郎さん、井上淑子さん）に支えられて編集事業の裏方雑務をこなした。百年史編集室の後身が現在の大学史資料室である。故に1991年5月の資料室正式発足から定年退職1年前の1995年3月まで2期4年間にわたって初代資料室長を拝命し、開室準備、室規程の立案整備、全学予算枠の獲得などの基礎づくりにあたった。そして、後事は2代目室長の広川禎秀さん（当時・文学部教授）に託した。

執筆面でとりわけ苦勞させられたのは、予定外の前史「第3章 大阪市立都島工業専門学校史」の仕事が加重されたことだった。当初、この章の作成は同校の後身である工学部が責任を負うことになっていた。ところが、原稿締め切り時期が迫ってきたにもかかわらず、ただの1行もできてこないのである。私は編集室長の役目として工学部教授会宛に督促を重ねたが、さっぱり埒があかない。それどころかA工学部長が評議員2名とともに3名連れ立ってわざわざ編集室まで足を運ばれ、懇願されたので、私がやむなく肩代わりせざるを得ない仕儀になった。そこで私は、本来の分担部分である第1章を早めに仕上げて息つく間もなく工専史の作業に移り、年表・索引作りで忙しくしていた桐村さんにも手伝ってもらって、基本史料収集のイロハから着手して大急ぎで執筆、どうやら間に合わせることができたものの、これにはほとんど閉口した。とはいえ、近代大阪における工業教育発達史を織り込んだ第3章工専史は、本学『百年史』の声価を落とすような「やっつけ仕事」ではないつもりだ。

閑話休題、私の本来の守備範囲だった第1章の執筆をめぐるいろいろな思い出がある。本「紀要」への寄稿を求められた機会に、その一端をお話ししよう。

2. 『六十年史』への疑問

『百年史』ができてから4半世紀近くたった2007年に『大阪市立大学の125年』（市大125年史編集委員会）が刊行された。「まえがき」によると、在学生や卒業生の皆さんに「手軽に

読んでもらえるような大学史の小冊子」であり、本書を通じて「大学との絆をいっそう強めていただければ」云々とのことである。いわば『百年史』の簡易要約版であり、われわれの仕事が広く読まれる機縁を作っていただけたわけで、たいへん喜ばしい。

本書『125年』の「Ⅰ 大阪市立大学のあけぼの」第1節「日本の近代化と大阪商業講習所の創設―福沢・五代・加藤・門田」の末尾には、「直接的には、加藤（政之助）の論説が発端となって設立がすすめられた。しかしその背景には、日本の近代化推進、国力増強のための近代商業学校の設立という福沢（諭吉）・五代（友厚）らの構想があった」（6ページ）と記されている。まさにその通りであって、本学の源流である大阪商業講習所の創設に及ぼした福澤諭吉と五代友厚の貢献には特筆大書すべきものがある。

ところが、1987年に『百年史』が世に出るまでの長い間、日本の公立大学史を代表すべき本学の歴史を語るにあたって、なぜか福沢や五代の事績が等閑視されがちだった過去を忘れてはならない。なかんずく福沢にいたっては無視も同然だった。それはたぶん、大阪商業講習所史の基本文献とみなされてきた『大阪商科大学六十年史』（1944年、以下『六十年史』と略称）の記述において、意外にも五代を語るところ少なく、ましてや福沢には全く触れられていなかったからだろう。

推察するに、『六十年史』はアジア太平洋戦争末期の戦時下非常時に作成されたので、明治初期の古い史実については調査不足のまま見切り発車せざるをえず、つつい五代や福沢の事績を見落としてしまったのだろう。現に同書には、「実の所、私立大阪商業講習所設立に関する経緯はこれ以上追及する資料がない。創立当初の書類一切が既に早く失はれて手の着けやうがない。以上の叙述は本年88歳の高齢を以て往時を語り得る加藤政之助翁の記憶を経とし、能ふ限りの史料を渉獵してこれを緯として僅かに織り成した」（12ページ）と、舞台裏の苦衷が正直に吐露されている。

とにかく『六十年史』によれば、1879年8月10日に大坂新報社に入社したばかりの新人記者加藤政之助青年が、僅か数日後の14・15日付け『大坂新報』紙上に「商法学校設けざるべからず」と題した大論説を発表した。青年実業家門田三郎兵衛がこれに共鳴し、加藤と協力して私立大阪商業講習所を設立する運びとなった云々。故にこの二人に講習所開設の功労者が限定され、なぜか大坂新報社主でしかも講習所創立員筆頭だった五代友厚の名は没却されている。福澤諭吉にいたっては「ふ」の一字も出てこない。不自然な話ではなからうか。

3. 五代友厚文書の成果

私は、割り当てられた大阪商業講習所史の執筆に着手するにあたり、『六十年史』の問題点に気がついた。そこで、同書の関係記述は一応参考にはなるものの軽々には依拠できず、たとえ手間暇はかかってもできる限り原史料から直接調べ直さねばなるまいと判断した。ところが、それは予想以上の難作業だった。私は学内や市公文書館・市庁舎の書庫などを探して回ったが、

すでに『六十年史』が「創立当初の書類一切が既に早く失はれて手の着けやうがない」と告白している通りで、餘なものは遺っていなかった。

その時、私に天啓がひらめいた。大阪商工会議所の付属商工図書館に所蔵されている「五代友厚関係文書」を調べれば何か有用な史料が出て来るのではなからうかと思ひ当たったのである。五代文書は、とくに経済史研究者の間で名高い貴重なコレクションであり、詳細な目録が作成されていて利用にも便利だ。

そもそも五代は明治草創期大阪財界の大立者で、商工会議所や証券取引所などの創設者、大阪経済で五代の息のかかっていないものはないとまで称された人物、前記のように私立大阪商業講習所の創立員筆頭にも名を連ねていた。故に五代文書を探せば必ず獲物を得られるに違いないと狙いをつけた。そこで大学から会議所に五代文書閲覧をお願いしたところ、こころよく許可をいただいた。私は、学務の合間をぬって商工図書館に通い、秘蔵されている五代文書の山と格闘した。

その労苦の甲斐あって、幾つかの貴重な史料を発掘できた。『百年史』全学編の劈頭を飾っている口絵写真「五代友厚・府立大阪商業講習所開所式祝詞」は、まさにその成果の一つだ。その他、「商業講習所・発起人・保護役・仮創立委員名簿」「大阪商業講習所設立申合規則」等々の珍しいものが次々に出てきた。これら新発見史料のお陰で史実が明らかになった。主要な史料は、『百年史』本文中に写真版で紹介してある。こうして、五代友厚こそ本学の源流である私立大阪商業講習所設立の中心人物だったことを学問的に論証できたのである。

4. 福沢諭吉との出会い

福沢との出会いはそれこそ偶然だった。神のお導きとしか思われぬ。

私が、例によって商工図書館で五代文書を調べていたところ、たまたま一冊の小冊子が出てきた。和紙に活版印刷した薄っぺらなパンフレットで、表紙に「商学校を建つるの主意」とあり、序文末尾に「福沢諭吉識」と記されている。この貧弱なパンフは、なんと1875年(明治8)に森有禮が東京に商法講習所(一橋大学の源流)を開設したときに、福沢が執筆した貴重な歴史的趣意書だった。福沢と森は、もともと明六社同人として親しい仲だった。

このパンフに目を通して見て、私は過去にも同じようなものを読んだ記憶があるとピンときた。「そうだ! 加藤政之助の『商法学校設けざるべからず』とそっくりではないか」。両者を比べてみると、多少の語句や文体の相違はあったが、論旨といい、議論の進め方といい、事例といい、結論にいたるまで瓜二つだった。「慶応義塾出身の加藤は、師である福沢の文章をなぜ剽窃したのだろうか。これは面白くなってきた」と、早速私は、探索を開始した。

五代側の史料に福沢側の史料を突き合わせてみると、かねて両者間には親交があったことが判明した。福沢(もしくは森)が「商学校を建つるの主意」を五代に示したのは、関西の富豪五代に資金援助を要請するためだったのかも知れない。他方、五代がこのパンフを手元に保存

していたのは、彼自身が早くから大阪にも商業教育の専門機関を開きたいと念願していたからだろう。五代は、1879年5月に『大坂新報』を手に入れると、福沢と同郷人で『郵便報知新聞』幹部だった藤田茂吉にたいして、慶応義塾出身の優秀な記者を推薦してほしいと頼んだ。藤田は福沢と相談して加藤政之助を紹介した。弟子の加藤が大坂新報社に採用されたのを喜んだ福沢が、五代に贈った懇篤な礼状が残っている。

5. 五代と福沢の復権

上述の一連の事実から私が到達した結論を、以下に『百年史』から抜き書きする。

- ①「福沢執筆の『国会論』が、門弟の藤田・箕浦両人の名で公にされた…、これから類推すれば、福沢一門の間では、先生の文章を弟子が『利用』することが皆無ではなかったように思われる。それどころか、福沢の方から積極的に加藤に書かせたこともありえないことではない。…五代が注目するに違いない加藤のデビュー作に商学校論を選ばせ、しかも、自分の『商学校を建つるの主意』を手本にせよと示唆したとも考えられる」(15ページ)。
- ②「さらに、加藤の商学校論執筆についても、予め五代が了解していた可能性も十分に考えられる。…五代が、大坂新報社に福沢門下生を招こう思い立った動機の中には、福沢の商学校論を大阪に導入したいとの期待も含まれていたのかも知れない。
いづれにせよ、五代の手元に福沢の『商学校を建つるの主意』があった事実は、五代が、加藤の社説出現以前に、すでに商業教育機関の設立に関心を寄せていたことを示唆している。このように推論すれば加藤の『商法学校設けざるべからず』は、実質的には五代と福沢との合作であったと見ることは、十分に根拠のあることといえる」(15～16ページ)。
- ③「かねて福沢の商学校論に触発されていた五代は、大阪にも同種の学校設立を計画し、傘下の『大坂新報』に招いた加藤に例の社説を書かせて(多分、福澤とも連絡をとりながら)世論の啓発・喚起をはかるとともに、若くて実行力のある門田三郎兵衛に準備作業を委ねたのではなかろうか」(17ページ)。

ここに大阪市立大学史上、つまり日本公立大学史上に五代友厚と福澤諭吉が復権した。私は、以上の結論をもちろん『百年史』に記述するとともに、乞われるままに2編の学術論文にまとめて学界に公表した(①「大阪商業講習所の誕生と福澤諭吉」『近代日本研究』2号〔福沢生誕150年記念号〕、慶応義塾大学福沢研究センター、1985年。②「私立大阪商業講習所の誕生と五代友厚」『大阪の歴史』18号〔五代没後100年記念号〕、大阪市史編纂所、1986年)。参照いただければ幸いである。

(もうり としひこ・大阪市立大学名誉教授)